

現代短歌の中の地球科学

～地質時代編～

髪のにほひ夜のすきまをわけくれば
カンブリア紀の海とおもひぬ

坂井修一「ジャックの種子」

カンブリア紀は古生代最初の地質時代を指します。カンブリアという名称は模式地である英国ウェールズの古い呼称、カンブリアに基づきます。生物の種類、個体数ともに爆発的に多くなりました。海綿類やサンゴ類の祖先的な性質を持つ動物が栄えていました。「カンブリア紀の海」という表現は、生命があふれた古生代の海に巨大な固着性動物(ウミユリなど)があたかも藻類のようにゆらゆらと揺れる様を、生命を生み出す女性の長い髪に重ね合わせたのかも知れません。

デボン紀の裸子植物のせしごとき
浅き呼吸を恋ひつつ睡る

河野裕子「森のやうに獣のやうに」

次の短歌はデボン紀です。デボン紀は中期古生代の後期約4億年前の時代で、名称は英国デボン州に由来します。裸子植物はデボン紀後期に出現し中生代に繁栄しましたが、デボン紀後期から次の石炭紀に繁栄したのはシダ種子目で既に絶滅しています。入れ替わって現れる裸子植物にはソテツやイチョウがあり、これらは現世まで生き残っています。またデボン紀には魚類が繁栄しましたが、陸上に両生類が進出するのはこの次の時代になります。

そのような事実をふまえると、短歌の鑑賞の方は、陸上に進出した太古の裸子植物が、ゆったりと深い呼吸ではなく、おずおずと「浅い呼吸」をしているという空想がよりはっきりと伝わり、そこに自分を重ねている20代前半の作者の不安と生命の息づきが生々しく伝わってきます。

わが愛の栖すみかといえばかりき胸に
耳あてており いま海進期

永田和宏「メビウスの地平」

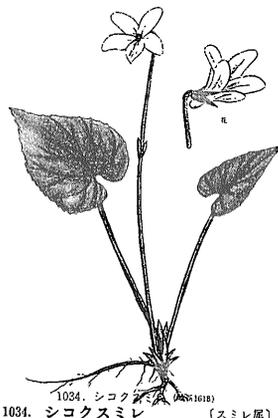
海進期、というのは地球科学に限った用語ではありませんが、海進とは海岸線が陸側に前進していくことをいいます。海水準変動には汎世界的に起こるものと局所的に起きるものがありますが、この短歌の場合、汎地球的に海面が上昇する様を想像すると、ダイナミックな愛情表現が伝わってきます。氷河期が終わって海水準が上昇した時代が連想できます。

氷河期より四国一花しこくいちげは残るといふほのかなり
君がふるさとの白

米川千嘉子「夏空の権」

ここでいう氷河期はおそらく第四紀更新世をさすのでしよう。そのうち最終氷期は約7万から1万年前になります。氷河期はただひたすらに冷え込むのではなく、氷期・間氷期、および亜氷期・亜間氷期を繰り返します。氷河や氷床の消長は海水面変動を引き起こして古地理的变化をもたらし、生物の移動に影響を与えました。この短歌は氷河期から種が続いている、厳しい時代を生き延びてきた四国一花という白い花をいとおしく思い、またその花に託して恋人(おそらく四国出身)への想いを歌ったものでしよう。

挿し絵はシコクスミレで、牧野植物図鑑からとりました。この歌に出てくる四国一花と同じかどうかわかりませんが、詠われているのはきっとこういう可憐な花だと思えます。



作者紹介

坂井修一：昭和33年愛媛県生まれ。

河野裕子：昭和21年熊本県生まれ。

永田和宏：昭和22年滋賀県生まれ。

米川千嘉子：昭和34年千葉県生まれ。

森尻理恵(産総研 地球科学情報研究部門 地球物理情報研究グループ)